

# 埼玉知事選結果を伝える新聞記事表現の特徴

大 西 五 郎

2003年8月31日に土屋前知事の辞任に伴う埼玉県知事選挙が行われ、民主党の衆議院議員を辞職して無所属で立候補した上田清司氏が、自民党埼玉県連が推薦した元総務事務次官の嶋津昭氏らを破って当選した。各新聞は翌日（9月1日）の朝刊で選挙結果を報道したが、名古屋で印刷・配達された朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、中日新聞、日経新聞の5紙を取り上げ、その記事に使われた言葉を比較して、新聞記事の表現の特徴を明らかにしたい。

まず一面の本記の見出し、別面の詳報の見出し、解説記事の見出しの語句を比較する。

## 【記事の見出し】

- |    |    |   |
|----|----|---|
| 朝日 | 一面 | 埼玉知事に前民主・上田氏 自民支援候補破る   |
|    | 詳報 | 「官から民」前面に訴え 「改革派」知事も支援<br>「住基ネット廃止も視野」民主の論客                       |
|    | 解説 | 埼玉知事選本社出口調査 小泉支持票、上田氏に 自民、人気生かせず<br>刷新期待、最多42%<br>民・由合併に「いい影響」菅代表 |
| 毎日 | 一面 | 埼玉知事に上田氏 「民由合併」効果も影響 大差で乱立戦制す                                     |
|    | 詳報 | 決戦の秋へ波紋 埼玉知事に上田氏 民主に追い風 自民、解散抵抗感も<br>官僚批判で「改革派」アピール…民主も広範組織支援     |
|    | 解説 | 「主役」は無党派 48%が上田氏に 出口調査  |
| 読売 | 一面 | 埼玉知事に上田氏 非自民 無党派層取り込む 投票率35.80%                                   |
|    | 詳報 | 埼玉知事当選上田氏 民の時代へ決意 「破壊と創造、大胆に」                                     |

- 民主「合併効果」アピール 自民「及び腰」響く  
国会に見切り？ 止まらぬ首長選出馬 民主すでに今年5人目  
解説 自民支持層2／3上田氏 公明票、島津氏に2割 土屋県政「支持せず」  
52%  
中日 一面 埼玉県知事に上田氏 事実上の民主勝利 解散時期に影響か  
詳報 民主「合併効果」を実証 自民に『解散恐怖症』も  
解説 首都圏非自民の“包囲網” 脱『官僚・政党』の風  
日経 一面 埼玉知事に上田氏 前民主衆院議員 無党派層取り込む  
詳報 埼玉知事に上田市 「大胆に破壊と創造」 住基ネット参加見直し  
解説 民・由、合併に弾み 自民、選挙戦略見直しも

◆短い語句で端的に表現し、事実を強調する語法。

まず本記では各紙とも“埼玉知事に上田氏”（朝日は前民主，中日は県を付け，日経は二本目の見出しの頭に前民主衆院議員をつけた）とまず事実を伝えていることで共通していた。表現の形式も体言止めにして語句を短くし，事実を端的に提示する形をとっている。

本記の脇見出しでは，破る（朝日），制す（毎日），取り込む（読売と日経）と終了した（過去）行為であるが現在形で書かれている。これも選挙についての新鮮な情報であることを強調する語法である。

◆選挙戦の様相を紹介し，勝因を暗示する詳報記事の表現法。見出しの語句は体言止め。

別面の詳報記事では，「官から民」前面に訴え（朝日），「改革派」知事も支援（同），官僚批判で「改革派」アピール（毎日），「破壊と創造，大胆に」（読売），「大胆に破壊と創造」（日経）と選挙戦の様相（上田候補の戦術）を紹介し，「反官僚・改革派」が勝因であることを読者に想像させる表現法になっていた。

このほか詳報では，「住基ネット廃止も視野」（朝日），決戦の秋へ波紋 民主に追い風（毎日），自民に『解散恐怖症』も（中日），住基ネット参加見直し（日経）と今後への影響にも触れていたが，見出しでは一様に体言止めになっているのが特徴である。これは見出しの字数が紙面スペースの関係上9字から12字に制限されているからである。

なお，毎日（「民由合併」効果も影響），読売と日経（無党派層取り込む）が上田氏勝利の原因を，中日（解散時期に影響か）が選挙結果が政界に及ぼす影響の予測を本記で触れていた。

解説記事では，朝日・毎日・読売が出口調査の結果から上田氏の勝因を分析し，小泉支持票，上田氏に 刷新期待，最多42%（朝日），「主役」は無党派 48%が上田氏に（毎日），

## 埼玉知事選結果を伝える新聞記事表現の特徴

自民支持層2／3上田氏（読売）と伝えた。中日と日経は、首都圏非自民の“包囲網”脱『官僚・政党』の風（中日）、民・由、合併に弾み 自民、選挙戦略見直しも（日経）と選挙結果の影響に触れていた。

さらに記事の表現について見てみよう。

### 【記事の表現】

#### (1) 結果についての記事

- 朝日 ・ 無所属新顔で前民主党衆院議員の上田清司氏（55）が、自民県連が推薦した元総務事務次官の嶋津昭氏（60）との事実上の一騎打ちを35万票を超える大差で制し、初当選した。
  - ・ 投票率は35.80%（前回59.19%）だった。
- 毎日 ・ 前民主党衆院議員、上田清司氏（55）が、自民党県連の推す元総務事務次官、嶋津昭氏（60）や前参院議員、浜田卓次郎氏（61）らを大差で破り、初当選した。
  - ・ 投票率は前回（00年6月59.19%）を大幅に下回る35.80%だった。
- 読売 ・ 新人の前衆院議員・上田清司氏（55）（無所属）が、元総務事務次官・嶋津昭氏（60）（無所属＝保守新党推薦）ら他の新人7人を大差で破り、初当選した。
  - ・ 投票率は35.80%と、衆院選と同日選となった前回（2000年6月）の59.19%を大きく下回った。
- 中日 ・ 無所属新人の前衆院議員、上田清司氏（55）が無党派層を中心に支持を集め、80万余票を獲得、元総務事務次官嶋津昭氏（60）＝保守新党推薦＝ら無所属、諸派の七新人を大差で破り初当選した。
  - ・ 投票率は35.80%で、衆院選とダブルになった2000年の前回知事選を23.39ポイントした回った。
- 日経 ・ 無所属新人で民主党前衆院議員の上田清司氏（55）が、元総務事務次官の嶋津昭氏（60）＝保守新党推薦＝ら7人を大差で破り、初当選した。
  - ・ 投票率は35.80%で、衆院選との同日選となった前回の59.19%を大きく下回った。

#### ◆「大差」「初当選」を強調、低投票率を指摘しながら前回との差を説明

各紙とも、「上田氏が嶋津氏を大差で破り（朝日のみ大差で制し）、初当選した」と大差であったこと、初当選であったことを強調して報じていた。当然のことながら結果を報じ

るのであるから、その表現方法は同じだった。

また各紙とも投票率が35.80%と低かったことを同じような表現で指摘していた。ただし朝日は単に数値だけを、毎日 は前回（00年6月59.19%）との比較を、読売・中日・日経は前回は“衆院選と同日選となった”という選挙の特徴にも触れて比較していた。

## (2) 選挙戦の様相についての記事

朝日 ・ 今回の知事選は、7月に土屋前知事の長女が東京地検特捜部に政治資金規正法違反容疑で逮捕され、県庁知事室や知事公館などを搜索された責任をとり、土屋前知事が辞職したため行われた。3期11年間続いた土屋県政の評価や政治とカネの問題が問われた。しかし、ほとんどの候補者が「改革」は訴えたが、具体策の提示はなかった。

- ・ 共産党と保守新党を除く各党は、今秋にも予想される衆院解散・総選挙への影響を恐れ、党本部レベルでの推薦は見送った。しかし民主党は、上田氏優勢の情勢をみて、選挙戦後半に対応を修正。菅代表と自由党の小沢党首がそろって現地入りするなど、9月末に予定される両党の「合併」をアピールした。

- ・ 一方、自民党は敗れた場合の小泉政権への悪影響を恐れて「自民対民主」の構図となる事態を避けつづけた。しかし告示後、個人的な支援として山崎拓幹事長、麻生太郎政調会長らが同党県連が推薦した嶋津昭氏の支援に入り、自民、民主が事実上ぶつかり合う総選挙の前哨戦となった。

- ・ 民主党を離党して立候補した上田氏は、土屋前知事の親族による県政への介入や大型公共事業に傾斜した県政を批判。行財政改革を前面に出し、「脱土建屋」をアピールした。中央官僚出身の島津、坂東真理子両氏を意識して、官僚批判を展開。長野県の田中康夫知事、神奈川県の松沢成文知事らの応援を受け、「改革派」を印象づけた。

毎日 ・ 当初、民主党は無党派を強調する上田氏に対する「友情支援」という位置付けにとどめ、上田氏に近い旧新進党の一部議員が応援する程度だった。ところが、各種世論調査などで上田氏優勢の結果が伝えられた中盤以降は、テコ入れに乗り出し、終盤には幹部が連日、埼玉入りした。特に菅代表は26日、自由党の小沢一郎党首とJR大宮駅前でそろって上田氏を応援。「私や小沢党首も負けずに国政を変えていきたい」と上田氏との共同歩調をアピールしていた。

- ・ 一方、自民党は県連レベルで元総務事務次官の島津昭氏（60）を擁立した

## 埼玉知事選結果を伝える新聞記事表現の特徴

ものの、党本部は最後まで知事選への関与に及び腰だった。山崎拓幹事長らは「大物」官僚を擁立したことが、かえってマイナスに作用すると判断。衆院選を控えて、選挙結果がもたらすダメージを最小限に抑えたいというのが、党執行部の本音だった。党幹部は31日夜、党内の動揺に予防線を張るように「国政には関係ない」と強調した。

終盤の25日、自民党県連会長の増田敏男衆院議員は党本部に山崎幹事長を訪ね、党本部として島津氏を推薦するよう要請した。しかし山崎氏は面会すら拒否。翌26日、青木幹雄参院幹事長が党本部としての関与を求めても、山崎氏は首を縦に振らなかった。それでも30日に麻生太郎政調会長が来援するなど党幹部や閣僚の応援が相次ぎ、実際には国政選挙並みの力の入れようだった。

- ・ 上田氏は、民主、自民両党に官僚を擁立する動きがあることを批判し、民主党を離党して立候補した。その後も島津、浜田、前内閣府男女共同参画局長、坂東真理子（57）の3氏が元官僚であることを「天下り官僚同士の戦い」と指摘し広く支持された。
- ・ 民主党は上田氏を個人的に支える「友情支援」と説明していたが、中盤以降は、自由党とともに本格支援した。
- 読売 ・ 上田氏は、県政刷新を強く訴えるとともに、道州制の導入を目指す「首都圏連合」を提唱。神奈川県松沢成文知事や長野県田中康夫知事らが応援に駆けつけ、有権者に「改革派」を印象付け、無党派層からも幅広く支持を集めた。
- ・ 告示前に離党した民主党県連からも「友情支援」を受けたほか、同党の菅直人代表と自由党の小沢一郎党首と一緒に街頭に立って応援演説するなど、両党の合併合意も有利に働いた形だ。
- ・ 今回の選挙では、共産、保守新党以外の政党は推薦を見送ったほか、各候補がそろってクリーンな政治の実現を訴えるなど主張に大きな違いがなかったこともあり、関心は低く、投票率は35.80%と、衆院選と同日選となった前回（2000年6月）の59.19%を大幅に下回った。
- 中日 ・ （民主党は）今回の知事選では結果的に勝者側に立ったとはいえ、もともとは主体的な候補者擁立ができなかった。
- ・ 党執行部の制止を振り切って出馬した上田氏が健闘しているのを見て「勝ち馬に乗ろう」という意識で支援を強めた印象はぬぐい去れない。
- ・ 「友情支援」による勝利は党組織の戦略性の薄さもうかがわせている。

- ・もともと山崎拓幹事長ら執行部は、嶋津氏が広範な支持を集めにくい官僚出身であることから、擁立に否定的だった。党埼玉県連は選挙が始まり、苦戦が伝えられると再三、推薦を県連から党本部レベルに格上げするよう要請。山崎氏は黙殺したが、これも選挙結果を中央政局に波及させないようにしようという思いからきている。
- ・だが、知事選に対する冷ややかな山崎氏の対応には、執行部内にも「党を挙げて戦うべきだ」（青木幹雄参院幹事長）との異論があった。党総裁選や、その後の内閣改造・党人事に向け、党内ににらみ合いが増幅する可能性もある。

- 日経
- ・自民党本部は当初から、埼玉県知事選が衆院選の前哨戦と位置付けられることを懸念し、あくまでも「友情応援」（党執行部）に徹する選挙戦を展開。元総務省次官の嶋津昭氏の推薦を決めた埼玉県連がテコ入れのため党本部に支援を求めたが、山崎拓幹事長らは再三の要請にも応じなかった。
  - ・民主党は序盤戦では政党色を薄めた戦い方だったが、終盤情勢で上田氏が有利に選挙戦を展開していると見るや、党幹部が積極支援。二十六日には菅代表と自由党の小沢一郎党首がそろい踏みで応援演説に訪れるなど自民党と民主、自由両党の対決図を打ち立てていただけに「衆院選の前哨戦として今後につながる」（幹部）と自信を深めている。

#### ◆過去の行為の記述型と状態の記述型、両方の混在など新聞によって様々

（政治とカネの問題が）問われた。（具体策の提示は）なかった。（推薦は）見送った。（両党の「合併」を）アピールした。（総選挙の）前哨戦となった。（「改革派」を）印象づけた。以上は朝日の記事の表現だが、行為の過去形の表現になっていた。これに対して毎日（応援する）程度だった。及び腰だった。（党執行部の）本音だった。力の入れようだった。と状態を過去形で表現したものが目立った。読売は（支持を）集めた。（有利に働いた）形だ。下回った。と行為と状態（共に過去形）が混在していた。一方中日は、（印象は）ぬぐい去れない。（薄さも）うかがわせている。（という思いから）きている。（増幅する）可能性もある。と主に現在形の表現になっていた。日経は、（要請にも）応じなかった。（自信を）深めている。と混在型だった。

次に上田氏の勝因を分析する記事について見てみよう。

#### (3) 勝因の分析

朝日 ・（上田氏は）国会で追及してきた官僚制度の弊害を県政に置き換え、「県に

## 埼玉知事選結果を伝える新聞記事表現の特徴

も外郭団体があり、役人が天下りする。霞が関と同じではないか」と訴えた。

- ・投票率は低かったものの、有権者たちは県政に「変化」をもとめた。
  - ・嶋津氏は、県議会で3分の2を占める自民党県議団を中心に組織選挙で戦ったが、出遅れが響き浸透しなかった。
  - ・民主党の立候補要請を断り、「無党派」を打ち出した坂東氏は、支援する市民団体の足並みがそろわなかった。
- 毎日
- ・上田氏は「官対民の戦い」と訴えて他候補との差別化を図って徐々に抜け出し、無党派層に浸透した。「上田氏優位」の見方が強まると「勝ち馬」に乗る団体や業者も増えた。
  - ・上田氏は31日夜、「国から地方に財源や権限を回し、地方が元気になるよう訴え、それが有権者に受け入れられたと思う」と勝因を語った。
  - ・官僚出身者を擁立した自民党の選挙戦術のつまずきだけでなく、民主、自由両党の「合併効果」も上田氏を後押ししたようだ。
  - ・島津氏は自民党本部の推薦を得られず、支持を伸ばせなかった。
  - ・元総務事務次官の嶋津昭氏は上田氏による官僚批判の格好のターゲットとなった。
  - ・浜田氏は参院で同一会派を組んだ公明党が自主投票を選び、票の上積みに苦しんだ。
  - ・坂東氏は変革を訴えたが、徹底したボランティア選挙も空回りした。
- 読売
- ・上田氏は県政刷新を強く訴えるとともに、道州制の導入を目指す「首都圏連合」を提唱
  - ・神奈川県松沢成文知事や長野県田中康夫知事らが応援に駆けつけ、有権者に「改革派」を印象付け、無党派層からも幅広く支持を集めた。
  - ・一方、嶋津氏は、自民党本部が推薦を見送ったことで、自民県連の単独推薦で出馬。終盤に保守新党の推薦を受けたが、事件の後遺症で業界団体の動きは鈍く、市町村の首長や議員も模様眺めが続いた。加えて、公明票が、参院会派で公明党に所属していた前参院議員の浜田卓二郎氏（61）に流れ、組織票をまとめ切れなかった。
  - ・前内閣府局長の坂東真理子氏（57）（無所属）は女性団体の支援を受け、女性票確保と無党派層への浸透を狙ったが、幅広い支持を得られなかった。
- 中日
- ・（千葉県知事選、神奈川県知事選、横浜市長選では）いずれも既成政党の推薦を受けない「非自民」系で、幅広く無党派層を取り込んだのが特徴。長

野県でも田中知事が既成政党の殻を打ち破る県政運営を続けている。

- ・ こうした首長の誕生を埼玉大学の平林紀子教授（政治学）は「既存政党に利益代表されない都市サラリーマン層が持つ政党や官僚制度への不満感を具体的な政策ですくい上げている」とみる。
  - ・ 田中知事も今回の選挙について「満員電車で通勤する埼玉県民が、候補者への具体的期待というよりも『政官業』の密室的な利権分配構造に対する嫌悪感を表明したのだと思う」と話す。
- 日経
- ・ 上田氏は「脱官僚支配」を訴えて改革派のイメージを強調。9月下旬に合併する民主、自由両党の支持層を手堅くまとめたほか、無党派層の多くを取り込んだ。自民党支持層の一部にも浸透するなど県内全域で幅広く支持を集めた。
  - ・ 嶋津氏は自民党埼玉県連や保守新党が推薦したが、自民党本部は推薦を見送り、保守票を固めきれなかった。
  - ・ 前参院議員の浜田卓二郎氏（61）は参院で院内会派を組んだ公明党が自主投票に回り、与党系候補が共倒れした格好。
  - ・ 前内閣府局長の坂東真理子氏（57）と、元県議の高原美佐子氏（60）＝共産推薦＝は支持が広がらなかった。

#### ◆各紙とも過去の事実を記述する表現だったが、中日は現在形で記述

朝日は、訴えた。まとめた。浸透しなかった。そろわなかった。毎日、増えた。伸ばせなかった。ターゲットとなった。苦しんだ。空回りした。読売も、集めた。まとめ切れなかった。得られなかった。日経も、得られなかった。固めきれなかった。広がらなかった。と過去形の表現になっていたが、中日は、続けている。とみる。と話す。と選挙戦の様相の記事同様現在形の表現を通していた。

今度は選挙戦の結果の今後に及ぼす影響についての記事を見てみよう。

#### (4) 今後への影響

- 朝日
- ・ 民主党の菅代表は「草の根から訴えたことが県民の理解を得られたのではないか。民主、自由両党の合併にもいい影響が出るだろう」と記者団に語った。
  - ・ 上田清司氏は当選後、本格的運用が始まった住民基本台帳ネットワークについて、「私自身は廃止を含めて見直したいと言っている。どこまで（見直しが）可能か検討したい」と述べた。

## 埼玉知事選結果を伝える新聞記事表現の特徴

- 毎日 ・ 晩夏的首都圏決戦は、自民党総裁選、その後の衆院解散・総選挙をにらむ中央政界のムードにも影響を与えそうだ。
- ・ 自公連携も不発に終わり、自民党議員には早期の衆院解散・総選挙に対する心理的な抵抗感が生まれそうだ。
- 読売 ・ 上田氏は県政運営に当たり、県政の信頼回復と同時に、選挙戦で敵対した自民県議が多数を占める県議会にどう対応するかといった課題も背負う。
- ・ 民主党では、今秋にも想定される衆院選に弾みをつけるものとの期待が高まっている。
  - ・ (自民党) 執行部は「国政への影響はない」と平静を装っているが、党内では、「無党派層の多い埼玉県での敗北は、合併後の民主党が衆院選でも都市部で支持を広げる前兆では」との見方も出ている。
- 中日 ・ 民主党幹部は「神奈川、埼玉と民主党衆院議員出身者が知事になった。衆院選も首都圏では圧勝できる」とほくそ笑む。(しかし途中から「勝ち馬に乗ろう」と支援を強めた)「友情支援」による勝利は党組織の戦略性の薄さもうかがわせている。
- ・ 自民党内では、衆院選先送り論も強まりそうだ。
  - ・ (自民党は) 党総裁選や、その後の内閣改造・党人事に向け、党内のにらみ合いが増幅する可能性もある。
  - ・ (自民党) 執行部にとってやっかいなのは党内に「解散恐怖症」が広がりそうなことだ。
- 日経 ・ 民主党は「衆院選の前哨戦として今後につながる」(幹部)と自信を深めている。
- ・ (自民党では) 反小泉勢力から「相手が勢いづいている時期にわざわざ選挙をする必要はない」として「10月解散—11月総選挙」のシナリオの練り直しを求める声が勢いを増す可能性も否定できない。

### ◆推測、関係者の見解を紹介し、断定的表現は避けている

得られたのではないか(朝日)、影響を与えそうだ、抵抗感が生まれそうだ(毎日)、見方も出ている(読売)、薄さもうかがわせている、可能性もある、広がりそうなことだ(中日)、強まりそうだ、可能性も否定できない(日経)と各紙とも推測の表現で記述している。また、民主党の菅代表は記者団に語った、上田清司氏はと述べた(朝日)、民主党では期待が高まっている、(自民)党内では(民主党が都市部で支持を広げる前兆ではないかとの)見方も出ている(読売)、民主党は自信を深めている(日経)のように関係者の見解や談話

を引用する形をとりながら今後への影響を示唆している。不確定要素がある今後のことについては断定的表現を避けている。

次に社説について見てみよう。まずタイトルの語句を比較する。

【社説のタイトル】

- 朝日 自民と官が嫌われた
- 毎日 「中央とのパイプ」はもう古い
- 読売 失墜した県政の信頼回復が課題
- 中日 総選挙の序章となるか
- 日経 県政私物化の根を断ち切れ

◆『意見』を明確に表明する社説のタイトル

客観的な事実の伝達を主とする一般記事に比べて社説では、嫌われた（朝日）、もう古い（毎日）、断ち切れ（日経）と主張が明確に述べられている。読売は「課題」で言葉を終わっているが、課題であるぞと事実上主張している。中日の「となるか」は疑問の形をとりながら今後の推移に期待感を込めている。つまり主観が表面に出ていると云える。

また語法としては記事の見出しの体言止めとは違い、完結した文章になっている。

[社説の文章]

<選挙結果を論ずる部分の文章では>

- ・ 予想を超える大差だった（朝日）
- ・ 上田清司氏が当選した。
- ・ 毎日新聞の事前の調査では8割近くの県民が、大なり小なり関心を示していた。だが、投票率は35.80%と期待ほど伸びることはなかった。（毎日）
- ・ 前民主党衆院議員の上田清司氏が当選した。（読売）
- ・ 前知事ファミリーの私物化を許した県政をどう刷新するか、その執行人を誰にするか、の選挙だった。（中日）
- ・ 民主党を離党して立候補した上田清司前衆院議員が当選した。
- ・ 投票率は40%を割る低いものだった。（日経）

◆事実を伝える表現

大差だった（朝日）、当選した（毎日・読売・日経）、なかった（毎日）、～の選挙だった（中日）、（投票率は）低いものだった（日経）と各紙とも過去形で直接的に事実を伝える表

## 埼玉知事選結果を伝える新聞記事表現の特徴

現になっていた。

〈選挙結果を分析する部分の文章では〉

- ・二つのことが見て取れる。一つは、自民党の勢いのなさである。もう一つは、自民党政治と持ちつ持たれつで行政を牛耳ってきた官僚候補は願ひ下げにしたいという都市有権者の意識だ。
- ・嶋津氏は、一昔前なら、知事候補として違和感なく受け止められたかも知れない。だが、もはやそうではない。
- ・（自民党の敗因）権力やポスト欲しさに右往左往する議員たちの姿も、埼玉県民に嶋津氏への投票をためらわせたのではなかろうか。（以上朝日）
- ・知名度が高く、しかも土屋県政と距離があったことが上田氏への期待度を高めた。
- ・立候補にあたり上田氏は民主党を離党したが、「友情支援」という形で、民主党の組織を活用できた。その一方で、田中康夫長野県知事や松沢成文神奈川県知事の応援を受け、無党派層への浸透を図った。
- ・自民党県連が推したのは嶋津昭元総務事務次官だった。地方行政のプロであると共に「中央とのパイプ」を期待してのことだ。埼玉県初の女性副知事を経験した坂東真理子前内閣府局長も無党派を旗印に出馬したが、官僚OBはいずれも票が伸び悩んだ。
- ・「パイプ」だけでは支持は広がらないことは、4月の統一地方選でも顕著にみられた。より魅力的なプラスアルファ的要素が加わらない限り、官僚出身候補でも容易に当選することは困難だ。
- ・一つは地方が国に依存する「分配の政治」が、バブル経済の崩壊でその機能を失ったからだ。加えて、「地方分権」時代の進展で、自立した地方自治を求める声も一段と強まっている。
- ・（投票率が伸びなかったのは）候補者の人選過程が交錯、政党と候補者の関係が複雑になっていた。加えて、争点とすべき土屋県政の総括を、各陣営とも控えたこともマイナスに働いた。（以上毎日）
- ・今回の選挙は「政治とカネ」の問題が焦点だった。上田氏の勝因は、知名度の高さに加え業界との癒着を根絶するため、官僚候補にはない行動力への期待が集まったからだろう。
- ・「政治とカネ」の問題が（畑、土屋と）二代の知事で続いたことは、腐敗の根の深さを示すものだ。投票率が前回より下回ったのも、警鐘と受け止める

べきだ。(以上読売)

- ・ 政党の候補調整能力の欠如をさらけ出した、出直し知事選でもあった。
- ・ 高級官僚OBが、政党色を消して相次いで名乗りを上げる中、この「官対官の知事選」を時代遅れだと痛罵して民主を離れて立ったことが、上田氏の勝利につながった。
- ・ 元総務事務次官の嶋津昭氏は自公保政権与党の枠組みでの支援を望んだが、官僚批判と与党票の分散で苦杯をなめた。元内閣府局長の坂東真理子氏には、今回選挙の発端となった同性の前知事長女の事件が、暗い影を落としたかもしれない。
- ・ 共産を除けば、いずれの政党も顔を隠して始まった選挙戦だったが、有権者はそれほど愚かではない。民主・自由と自民・公明・保守新の与野党対決構図が公然だったのだ。
- ・ 民主系の前衆院議員が圧勝した埼玉県知事選挙は、自民の心身の衰えを印象づけてもいる。
- ・ (自民) 党執行部は総裁選やその後の総選挙への悪影響を恐れて無関心を装った。自民執行部はその一方で、総選挙に公明や保守新が埼玉で立てる候補の推薦を決めた。見苦しい責任回避体質のにじむ集票工作である。(以上中日)
- ・ 土屋氏の長女が政治資金規正法違反で逮捕され、一族の県政私物化の実態が明るみに出たというのに、県民の関心は高まらなかった。土屋県政はオール与党に近い体制だったが、それとは全く無縁の有力無党派候補を欠いたことも一因だろう。
- ・ 総選挙の前哨戦とも見られたが、政党の取り組みは及び腰だった。民主党は上田氏に対して友情支援にとどめ、自民党も元総務事務次官の候補を県連推薦にとどめた。
- ・ 民主党は今年四月の神奈川県知事選に続く同党の国会議員からの転出候補の当選で勢いづくことは確かだ。しかし、自主投票に近い中途半端なかかわり方では前哨戦の勝利とは言い難い。
- ・ 土屋前知事は十一年間の在任中、大型公共事業を次々に手がけたが、その間に県債残高は三・二倍の二兆七千億に膨らんだ。地元企業優先の公共工事発注は建設業者との癒着を深めた。たまたま長女の事件で引責辞任に追い込まれたが、開発中心の県政は限界にきていたといえよう。
- ・ 県民に対する世論調査でも、「新たな大規模公共施設は不要」が四割を超え、重視する政策では「医療・福祉の充実」がトップだった。(土屋前知事は)

## 埼玉知事選結果を伝える新聞記事表現の特徴

批判を浴びにくい体制に安住している間に、県民との間に溝が広がったようだ。(以上日経)

### ◆断定的な判断を示す表現を多用

「～だ」「である」「ではない」「だった」「だったのだ」「べきだ」や「図った」「悩んだ」「働いた」「つながった」「とどめた」などという断定的な判断を表明する表現が多用されている。また「一昔前なら受け止められたかも知れない。だが、もはやそうではない」と過去の状況との違いを強調するために一旦推測の形をとった後それを否定するものもあった。一方「埼玉県民に嶋津氏への投票をためらわせたのではなかろうか」「上田氏がこれに応えられるだろうか」「期待が集まったからだろう」と行為者の気持ちを推測する場合には断定的表現を避けている。その他「かもしれない」「といえよう」もあった。

その新聞社独自の視点を示す場合には推測を交えた表現になっていたのが特徴である。

(今後への影響を予測あるいは課題を提起する部分の文章)

- ・ 埼玉県も、過去の県政のつけで財政は危機的だ。嶋津氏でなく上田氏が選ばれたのは、改革の実をあげられそうだという期待からだろう。あとは、上田氏がこれに応えられるかどうかだ。
- ・ 民主党は喜んではいられない。来るべき総選挙で、埼玉県民が示したような期待に応えることができるだろうか。こちらも時間は限られている。(以上朝日)
- ・ 国会議員から知事など首長への転身が続出している。低迷する国政とは対照的に、新たな政治課題を提起する元気のよい首長も目立つ。国政によき刺激を与え、政治変革への期待を高めてもらいたい。(以上毎日)
- ・ 新知事は（腐敗の）再発防止のため、徹底した内部調査を行い、体質にメスを入れる必要がある。業界との癒着を断つために、知事が率先して取り組むのは当然だ。
- ・ 上田氏はマニフェスト（公約）で県と取引関係のある企業からの献金は一切受けないと宣言した。その公約通り、実行に移さなければならない。
- ・ 大型公共事業で累積赤字が二兆八千億円に膨らんだ県財政の建て直しを急がねばならない。
- ・ 世論調査で主に期待する政策として有権者が挙げたのは「福祉や高齢者対策」と「景気・雇用対策」だ。財政の建て直しを図りつつ、それらの課題にどう取り組んでいくか。新知事の政策立案力と実行力が問われている。(以上読売)

- ・首都圏での自民の姿が一段と希薄になっている。私たちはこれが、近づく総選挙の帰趨を占う序章になるかもしれないと注目する。
- ・勝ったつもりの民主の側にも苦言を呈したい。異様なほどの低い投票率だった責任の一端は、有権者の政党離れに真正面から取り組もうとしなかったという点で、自民とも分かち合わなければならない。都合の良い「風」頼みでは、政権奪取などとても現実になるとは誰も思わない。(以上中日)
- ・「彩の国」という愛称を付け、豪華な公共施設で「ダサイ」イメージの払しょくに努めてきた埼玉県だが、政治や行政は旧態依然であることを暴露してしまった。新知事は透明な県政に改め、私物化を許す腐敗の根を断ち切らねばならない。
- ・土屋氏は全国知事会会長として地方分権を推進したが、地方に抑制の効かない権力者を生むだけでは何のための分権かわからない。本来、自治の主役は住民や市町村だ。今、知事の動きが目立つのは都道府県への分権が先行したことによる過渡期の現象だ。知事は市町村への分権の橋渡し役であることを忘れては困る。(以上日経)

#### ◆今後への期待の表明と刷新への強い要望の表明

今後への影響は記事の部分でかなり触れていることもあって、社説ではそれよりも今後の“課題”の提起が多い。「応えることができるだろうか」「時間は限られている」(朝日)「高めてもらいたい」(毎日)「注目する」「(風頼みでは政権奪取などとても現実になるとは)誰も思わない」(中日)「忘れては困る」(日経)と新知事あるいは民主党の今後の対処に期待を表明しているものと、「取り組むのは当然だ」「実行に移さなければならない」「実行力が問われている」(読売)「分かち合わなければならない」(中日)「断ち切らねばならない」(日経)と強く実行を迫るものと両方あった。当然誰でもが思う利権集団の排除など県政の刷新については強く要望する形をとっている。

社説全体としての表現は、比較的客観的な表現にとどめようとしている一般記事に比べ、明確に主張している文章が多く、「～ねばならない」「～べきである」と強い意思を表す表現になっている。事実について明確になっていて評価(善悪)がはっきりしている問題についてこのような語法を用いることが多い。一方、社としての見解を述る部分や相手に同意を促がすような問題については「ではなかろうか」「期待される」「もらいたい」など推測・仮定を交えた表現をふくみ、そういう結果になることが当然であると間接的に要望を表現するが多い。